

# コミュニケーション行為への 動機的態度測定を試み

——仮想の状況による予備的検討——<sup>(1)</sup>

永 田 良 昭

## I. 問 題

Newcomb (1953) は、社会的な相互作用をコミュニケーション行為という視点からとらえ、コミュニケーション行為の基本的な機能は、行為の対象となるものについて人々の間に「共通の方向づけ (co-orientation)」を形成させることであると述べている<sup>(2)</sup>。一般に複数の人が協同的な活動——すなわち、相互依存的な分業と協業のシステムとしての集団的な活動——を行うためには、Bales (1950) が彼の「相互作用過程の分析」の枠組で仮定しているように、人々の間に当面の活動の基本的な方向についての共通の理解がなければならず、その共通の理解にもとづいて、具体的な行為のレベルにおいてもいかなる行為を助長し、いかなる行為を抑制するかという行動の基準——規範——についての共通の理解を成立させなければならぬと考えられる。

Sherif & Sherif (1956) は、この規範の成立過程について「共通の目標をもつ人々の間に相互作用が発生し」(pp. 182～)、「相互作用を通じて規範が成立する」(pp. 240～)とし、一方、Bales & Strodtbeck (1951)

は相互作用過程が「方向づけ」、「評価」、「統制」、「合意の成立」そして「緊張の解消」等の過程を推移するとの位相仮説を提出している。

しかし、Bales からもその位相仮説がどのような条件の場合に成立するかについては今後の検討が必要であることをのべているように、ここで仮定された位相の推移は必ずしも一般化できるわけではない(Bell, 1982)と同時に、事実上の問題としては、Schachter (1951) が実験的に設定したように「合意」の成立しない場合もあり、「共通の方向づけ」の成立条件についての検討が必要である。

さらに、分業と協業の体制をもつ協同のシステムとしての集団過程においては、Doise らのいう社会的-認知的葛藤(socio-cognitive conflict)(Mugny & Doise, 1978; Doise & Mackie, 1981)が協同のシステムそれ自身に起因して発生することが予想される。協同のシステムを特徴づける地位と役割の分化は、地位と役割の差異にもとづく当面の状況についての理解、評価などに差異をもたらし、社会的-認知的葛藤を顕在化させる可能性を内包することになるからである(永田, 1987)。

このような社会的-認知的葛藤が、コミュニケーション行為を抑制することはいわゆる認知的斉合性を維持しようとする傾向を仮定する諸理論(Festinger, 1957; Heider, 1958)の予測するところである。現実の問題としては、コミュニケーションを抑制しようとする力が直ちに集団の崩壊をもたらすとはかぎらない。社会的-認知的葛藤が相互理解を伴う強固な関係形成の契機になることもあり得る(永田, 1987)一方では、葛藤をもたらす成員の排除などの集団の崩壊の危険(Schachter, 1951)をもたらす可能性もある。

従来 of 集団研究は、この2つをわける要因を明らかにするには至っていないように思われる。

これに対し、Berlo (1960) は、コミュニケーション関係にある人々の行為の相互規定性——Berlo のことばに従えば相互依存性——を区別することによってコミュニケーションのレベルを区別することを提唱している。すなわち、相手が存在するという条件のみに規定されてメッセージが構成され、メッセージの内容は相手の行動と文脈上のつながりをもたない「限定的 - 物理的相互依存 (definitional - physical interdependence)」、一方の反応が他方の反応を直接規定する「作用 - 反作用的相互依存 (action - reaction interdependence)」、相手の反応の予測にもとづいてメッセージが構成される「期待の相互依存 (interdependence of expectation)」、感情移入・相互的な役割の取得をともなう「相互作用 (interaction)」という4つのレベルを区別することを提唱している。

Berlo の提案は、どのような要因によって、成立するコミュニケーションのレベルのちがいが生じるかとか、このレベルを区別する指標も明らかにされていないという意味で具体性を欠くものといわざるを得ない。しかし、「共通の方向づけ」の成立過程についてのこれまでの集団研究に欠けていた視点の一つを提供するものであろう。すなわち、共通の規範の成立、あるいは「共通の方向づけ」の成立の条件を明らかにするには相互作用の動的な過程を規定している要因、あるいはコミュニケーションが——Berlo のことばによれば——どのようなレベルで成立しているかが問題になるであろうということである。

永田 (1984) は、当該の論題についてのエッセイからその筆者の態度の評定を求め、その評定値の極端さ (extremity) から推定される「認知的スキーマの成熟度」(Tesser & Leone, 1977) と、そのエッセイの筆者に対するメッセージが相手の態度や論点と文脈上の「関連性」をもつこととの間に顕著なつながりがあることを示唆する実験的な事実を得た<sup>(3)</sup>。

## コミュニケーション行為への動機的態度測定を試み（永田）

このことは、当該の論題に対する構造化された明確な「認知的スキーマ」をもつことと、論点のかみあうコミュニケーションの交換（この場合には「送り手」として）を行うことが関係することを示すものと思われる。すなわち、当該の論題に対する態度の構造的特性との関係を検討することが必要であることを示している。

しかし、このような個体の態度の構造的特徴のみによって Berlo の指摘するようなコミュニケーションのレベルの差異の成立が説明できるわけではないであろう。自発的な情報との接触の際にはたらく選択性をとりあげた研究の結果は、コミュニケーション行為の動機を区別することが必要であることを示唆している（たとえば、Frey & Wicklund, 1978）。態度の構造的特質と動機とは必ずしも独立とは考えられない。おそらく、認知的に「未成熟な」態度をもつ場合には、たとえ、有用な情報であっても認知的な斉合性をおびやかす情報が積極的に求められることは予想し難いように思われる。しかし、Tesser ら（1977）のいう「成熟した認知的スキーマ」が成立している場合にも、いかなるコミュニケーション関係にも積極的に参加するとはいえないように思われる。ここに動機づけの問題がある。

## II この研究の目的

前項の考察にもとづいて、コミュニケーション行為への動機的な態度を測定する尺度を構成することがここでの目的である。前項の考察からも明らかかなようにここで問題とされるコミュニケーション行為は、社会的な相互作用の過程を情報の交換という側面からとらえることに他ならない。したがって、具体的には社会的な相互作用の次元に対応したコミュニケーション行為への態度を測定する尺度が構成し得るかがここでの問題である。

Jennings (1943), Bales (1950), あるいはリーダーとフォロワーの関係についての Halpin & Winer(1957), 三隅と白樫(1963), 永田(1965), また, 対人関係の次元についての Foa (1961), 永田 (1961), また, コミュニケーション過程の記述のための第三者による観察カテゴリーについての Penman (1980) の研究などを手掛として, 「知識の獲得」と「知識の提供」, 「好意の獲得」と, 「好意の表明」と名づけられた4尺度を基本とする5つの尺度を構成すると思われるコミュニケーション行為をあらゆる項目が収集された。「知識の獲得」と「知識の提供」は, 集団機能のいわゆる「課題環境の問題の処理」に関係する次元に対応するものとして構成されたものである。「好意の獲得」と「好意の表明」は「対人関係の問題の処理」の次元に対応するとみられるものである<sup>(4)</sup>。「課題環境の問題の処理」に関係する次元は, さらに一般的にとらえれば, 人間関係あるいは集団がその外にある環境との間に適応的な関係を形成する過程にかかわる機能をあらゆる次元と考えられるものである。

これを具体的なコミュニケーション行為としてとらえたとき, 環境についてのさまざまな知識を提供し, あるいはそれを求めるなどの行為としてとらえられると考えられる。これに対して, 「対人関係の問題の処理」は人間関係あるいは集団の内部的な関係それ自体の調整あるいは維持の機能に関係する次元と考えられるものである。この機能が具体的な相互作用の過程あるいはコミュニケーション行為としてどのような形で表現されるかについては「課題環境の問題の処理」にかかわる行為ほど明確にされているとはいえない。しかし, Bales (1958) や Burke (1967) から示唆されるように, 当面のところはその基本的な表現型を好意的な感情の表出としてとらえることが出来ると思われる<sup>(5)</sup>。

この研究の目的は, コミュニケーション関係にかかわる際の個人の動機

的態度の測定尺度を構成することである。したがって、「課題環境の問題の処理」と「対人関係の問題の処理」を相互作用過程にみられる個人レベルのコミュニケーション行為としてとらえ、いわゆる「送り手」と「受け手」の行為を区別するために「課題環境の問題の処理」については「知識の獲得」と「知識の提供」と名づけられる2尺度が区別され、「対人関係の問題の処理」については「好意の獲得」と「好意の表明」の2尺度が区別された。実際には、測定項目の選定の過程で、上述の4尺度のなかに含まれないと思われる「話題」とコミュニケーションの「相手」への接近または回避の態度を表わすとみられる項目が付け加えられ、5尺度が構成された。この尺度は、日常的なコミュニケーション行為についての経験的な考慮によって付け加えられたもので、とくに理論的な根拠があるわけではない。また、「相手」への接近、回避と「話題」への接近、回避とは必ずしも単一の尺度を構成するものとは考えられないが、またこれが分離するとみならず十分な根拠もないと思われるためとりあえずこれを1尺度として各尺度の内的整合性の検討が行われる。

これらの5尺度によって、コミュニケーション過程の動機的態度のすべての次元を網羅していると考えられるわけではない。前項でのべた、われわれの問題からみて当面必要と思われる次元のみがとりあげられているが、しかし、少なくとも社会的相互作用という面からみれば、すでに述べた考察からみても主要な側面はとらえられていると思われる。

ここでの目的は上記の5尺度を構成する測定項目の選定と、それらの項目群によって信頼性の高い尺度が構成され得るかを検討することに限定される。各尺度間の関係と尺度の実際的な妥当性についての吟味は、ここでは行われぬ。とくに各尺度相互の関係をここでとりあげない理由は、「課題環境の問題の処理」の機能と「対人関係の問題の処理」の機能は必

ずしも独立とは考えられないと同時に常に固定した関係にあるとも思われないからである(永田, 1987)。

### III. 方法と手続

(1) 被験者：女子大学生 104 名。

(2) 手続：質問紙法による調査研究であるが、目的から考えて可能な範囲で一般性をもつコミュニケーション状況を設定することが必要であると思われた。ここでは、第一に、動機づけの強弱について偏りのない状況を設定すること、第二に、コミュニケーションの障害、すなわち、コミュニケーションの相手の役割を取得することの容易さの程度についての難易度に著しい偏りが生じないように考慮することが検討された。第一の問題については、コミュニケーションの相手がどのような意見、態度をもつかについての予測の手掛りの多少という操作によって条件の統制が行われた。すなわち、相手の態度を推測する手掛りが少ない場合には、積極的にメッセージを送ろうとする動機づけが抑制されると考えられるからである<sup>(6)</sup>。

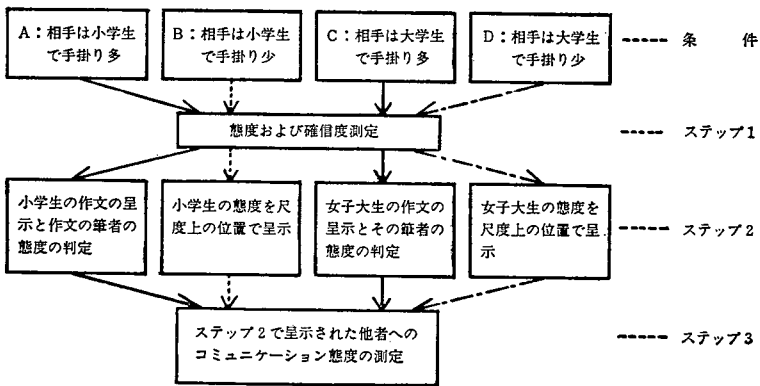


図1 資料収集手続

第二の問題は、コミュニケーションの相手を小学生と想定するか大学生と想定するかで操作された。被験者が大学生であることにより、とくに相手の役割を取得するための努力をさほど必要としないと思われる大学生を相手とする場合とこれに対比されるものとして小学生が選定された<sup>(7)</sup>。

手続の概要は、図1に示されている。以上の2×2の要因を組み合わせる4条件が設定され、104名の被験者はこの4条件に26名ずつ割当てられている。ここで用いられた論題、作文の内容は注記<sup>(8)</sup>にある。なを、図1のステップ1の手続はここでの報告とは別の目的のために挿入されたものであり、これについては稿を改めて報告する。

#### IV. 結果

表1, 2, 3, 4, 5, 6は各尺度ごとに項目内容、項目間の積率相関係数および各尺度の内部構造を示すための尺度内の因子構造と共通性を示したものである<sup>(9)</sup>。なお、各尺度の内部構造を検討するための因子構造は、項目間の積率相関係数をもとに主因子解により固有値1.0以上の因子を抽出し、この手続で2因子以上が抽出された場合はバリマックス法によって因子の回転を行った<sup>(10)</sup>。

表1をみると、項目26がその他の項目との相関が低く、またこれを除外するとほぼ1因子構造をもつことがわかる。また、項目26はその他の項目にくらべて共通の因子で説明できる分散が極めて小さいことが示されている。項目26以外は能動的な情報の獲得への態度を示すのに対して、項目26の表現するものは受動的かつ情動的ともみられる態度であるところにこの項目が異質である理由があるように思われる。表1に示す結果から、項目26を除いて、項目6, 11, 22, 24, 29, 35, 39の7項目をもって「知識の獲得」への態度をあらわす尺度とすることができよう。表2の



表1 「知識の獲得」に関する尺度の項目間相互相関と因子構造

項 目	相 関 係 数								因子行列	
	6	11	22	24	(26)†	29	35	39	I	h <sup>2</sup>
6. 相手から知識を得ようとした……………		.634	.543	.573	.349	.422	.618	.449	.715	.511
11. 相手から自分にない視点を得ようとした……………			.473	.565	.220	.621	.548	.415	.698	.487
22. 相手に自分の考えの不備を指摘してもらおうとした……………				.680	.392	.469	.501	.531	.712	.506
24. 相手から正しい判断の手掛りを得ようとした……………					.367	.580	.693	.597	.831	.690
(26.) 相手から説得されるのを待っていた……………						.268	.370	.364	.443	.196
29. 相手の考えを知ろうとした……………							.648	.553	.718	.515
35. 相手から何らかの情報を得ようとした……………								.756	.853	.727
39. 相手から何らかの事実を知らせてもらおうとした……………									.740	.547

†( )で番号をかこんだ項目は尺度の一次元性の保持の観点から尺度から除外される項目を示す。

表2 「知識の提供」に関する尺度の項目間相互相関と因子構造

項 目	項 目	相 関 係 数										因 子 行 列		
		2	3	(8)	(14)	(15)	16	19	32	(42)†	I	II	h <sup>2</sup>	
	2. 相手に事実を知らせようとした……………	.610	.398	.398	.088	.350	.512	.396	.312		.600	.264	.430	
	3. 相手に自分の考えを伝えようとした……………		.330	.307	.074	.418	.567	.625	.313		.762	.152	.603	
	(8.) 相手を説得しようとした……………			.501	.303	.299	.269	.240	.413		.295	.550	.390	
	(14.) 相手の考えを批判しようとした……………				.396	.434	.288	.281	.339		.272	.684	.541	
	(15.) 相手と自分との立場のちがいを明らかにしようとした……………					.411	.045	.078	.156		-.032	.624	.391	
	16. 相手の気づかない視点を示そうとした……………						.466	.459	.407		.459	.492	.452	
	19. 相手に情報を提供しようとした……………							.623	.435		.777	.126	.619	
	32. 相手に自分の知識を伝えようとした……………								.505		.772	.128	.612	
	(42.) 相手に何が正しい判断かを知らせようとした……………										.479	.337	.343	

†( )で番号をかこんだ項目は尺度の一次元性の保持の観点から尺度から除外される項目を示す。

表3 「好意の獲得」に関する尺度の項目間相互相関と因子構造

項 目	相 関 係 数								因 子 行 列			
	5	(7)	10	(12)	18	30	36	40	(43)†	I	II	H <sup>2</sup>
5. 相手の関心を自分にむけさせようとした……………	.275	.499	.383	.530	.507	.426	.402	.228		.583	.246	.401
(7.) 相手を怒らせようとした……………		.191	.119	.079	.218	.047	.213	.634		.092	.847	.725
10. 相手の共鳴を得ようとした……………			.450	.603	.500	.602	.583	.169		.750	.136	.580
(12.) 相手がものを云いやすい雰囲気を作ろうとした……………				.501	.336	.527	.435	.118		.578	.063	.338
18. 相手からの支持を求めようとした……………					.679	.603	.602	.131		.817	.042	.669
30. 相手を自分に同意させようとした……………						.667	.589	.264		.767	.197	.627
36. 相手からの理解を得ようとした……………							.633	.049		.824	.043	.681
40. 相手の好意を得ようとした……………								.182		.734	.144	.560
(43.) 相手に反発、反感を生じさせようとした……………										.112	.738	.558

†( )で番号をかこんだ項目は尺度の一次元性の保持の観点から尺度から除外される項目を示す。項目12はやや共通性が低いために除外される。

表4 「好意の表明」に関する尺度の項目間相互相関と因子構造

項 目	相 関 係 数									因 子 行 列		
	1	17	(20)	21	(25)	27	(34)†	45	46	I	II	h <sup>2</sup>
1. 相手への好意を伝えようとした.....	.593	.100	.520	-.054	.496	-.098	.450	.597		.669	-.035	.449
17. 相手への関心を伝えようとした.....		.180	.562	.067	.549	-.068	.494	.606		.709	.080	.509
(20.) 相手への怒りを示そうとした.....			.116	.562	-.003	.115	.116	.212		.138	.745	.574
21. 相手への共鳴を示そうとした.....				.060	.658	.041	.702	.673		.812	.044	.661
(25.) 相手への反発、反感を示そうとした.....					.002	.173	-.030	.051		.004	.756	.571
27. 相手への理解を示そうとした.....						-.030	.662	.626		.775	-.074	.606
(34.) 相手に自分の考えをかくそうとした.....							.044	.001		-.025	.194	.038
45. 相手と同意であることを示そうとした.....								.763		.809	-.007	.655
46. 相手を支持していることを示そうとした.....										.866	.092	.758

†( )で番号をかこんだ項目は尺度の一次元性の保持の観点から尺度から除外される項目を示す。

表5 「相手および話題に対する接近、回避」に関する尺度の項目間相互相関と因子構造

項 目	相 関 係 数										因 子 行 列			
	4	(9)	13	23	(28)	31	33	(37)	(38)	(41)†	44	I	II	h <sup>2</sup>
4. 相手にまじめに應對しようとした……………												.638	-.147	.492
(9.) 相手との話しを適当に打ち切ろうとした												-.219	.695	.530
13. 相手からの熱心な應對を求めた……………												.707	.023	.500
23. 相手の誠実な應對を求めた……………												.803	-.046	.647
(28.) 相手に話題をかえさせようとした……………												-.036	.724	.525
31. 相手に熱心に應對しようとした……………												.834	-.086	.703
33. 相手に誠実に應對しようとした……………												.748	-.210	.603
(37.) 相手の話しに深入りしないようにした…												-.226	.638	.458
(38.) 相手に適当に調子をあわせようとした…												-.032	.580	.337
(41.) 相手の考えを無視しようとした……………												.022	.713	.508
44. 相手とすすんで話し合おうとした……………												.815	-.137	.683

†( )で番号をかこんだ項目は尺度の一次元性の保持の観点から尺度から除外される項目を示す。

コヒキニケーショソノ行為への動機的態度測定を試み(永田)

表 6 「話題の回避」に関する尺度の項目間相互相関と因子構造

項 目	項 目	相 関 係 数					因 子 行 列		
		9	28	34	37	38	(41)†	I	h <sup>2</sup>
	9. 相手との話しを適当に打ち切ろうとした…		.542	.259	.471	.431	.467	.652	.426
	28. 相手に話題をかえさせようとした………			.477	.400	.345	.583	.715	.511
	34. 相手に自分の考えをかくそうとした………				.475	.458	.437	.624	.390
	37. 相手に話しに深入りしないようにした……					.522	.433	.689	.475
	38. 相手に適当に調子をあわせようとした……						.370	.626	.392
	(41.) 相手の考えを無視しようとした………							.695	.483

† ( )で番号をかこんだ項目は尺度から除外される項目を示す。なお、項目41を除外したのは主として項目の表現が強く、不適当とみなされたためである。

表7 残余項目の相互相関と因子構造

項 目	相 関 係 数							因 子 行 列	
	7	8	20	25	26	41	43	I	h <sup>2</sup>
7. 相手を怒らせようとした……………		.481	.467	.313	.370	.433	.634	.702	.493
8. 相手を説得しようとした……………			.431	.405	.317	.299	.433	.596	.355
20. 相手への怒りを示そうとした……………				.562	.386	.415	.455	.695	.483
25. 相手への反発、反感を示そうとした……………					.268	.417	.499	.628	.394
26. 相手から説得されるのを待っていた……………						.416	.418	.540	.292
41. 相手の考えを無視しようとした……………							.509	.630	.397
43. 相手に反発、反感を生じさせようとした…								.779	.606

ロジック・セッション行為への動機的態度測定を試み(永田)

結果は、これらの項目群が項目 2, 3, 16, 19, 32 と、項目 8, 14, 15, 42 という 2 つの群にわけられることを示している。項目 8, 14, 15, 42 は表 1 の項目 26 と同様に中立的な情報の提供という以上に情動的な内容を含むところに他の項目と分離する原因があるように思われる。前者の項目群は「知識の提供」と呼ぶことができるであろう。

表 3 は、「好意の獲得」を期待する態度の測定のために構成された項目群の内部構造を示しているが、前記の尺度と同様な基準で項目の選別を行うと、項目 5, 10, 18, 30, 36, 40 の 6 項目からなる群と項目 7, 43 からなる群にわかれることが示された。前者は項目の内容からみて「好意の獲得」を期待する態度を示すものといえることができよう。

表 4 は、「好意の表明」をあらわすと考えられる項目からなるものである。これまでと同様な基準にしたがうと、項目 1, 17, 21, 27, 45, 46 は一次元性をもつとみることができよう。項目 1 の共通性がやや低い後述する信頼性を高めるために、この項目を加えて尺度を構成する。

表 5 は、コミュニケーションの相手への対応の積極性および話題への接近または回避の態度をあらわすと思われる項目群を一括してその内部構造を検討した結果を示したものである。先に述べたように、これらの項目は、基本的な 4 尺度を構成すると思われる項目を選定する過程で、収集された項目の中からコミュニケーション行為に関係する無視しがたいものとして付加された尺度である。これらの項目の相互連関についてはあらかじめ明瞭な理論的枠組をもたないためとりあえず一括して内部構造が検討された。この結果をみるとかなり明瞭な 2 因子構造をもつとみなし得ることがわかる。項目 4, 13, 23, 31, 33 および 44 をもって 1 尺度を構成し、残余の項目 9, 28, 37, 38, 41 からなる別尺度を構成することができよう。表 6 は、後者に表 4 の項目 34 を加え改めてその相互の関係を検討した



結果である。

これらの結果から、項目 4, 13, 23, 31, 33, 44 からなる尺度と、項目 9, 28, 34, 37, 38, 41 からなる 2 尺度とすることが適当であると考えられる。前者はコミュニケーションの相手との関係に対する積極、消極の態度に関係するものとみることができよう。「関係への関与」と命名する。後者は話題への接近、回避の態度に関係するものと思われる。「話題の回避」と呼ぶことができよう。

以上の各尺度の内部構造の検討の結果から各尺度から除外された項目をみると、そこには一見してかなりの共通点がみられるように思われる。これらの項目のみについて改めて相互相関を求めた結果が表 7 である。その結果はこれらの項目がある程度高い相関関係にあること、項目内容からみるといずれも感情あるいは情動的な要素を含むところにその共通点があるように思われるが、1 因子構造をもつとみるにはやや共通性が低く、これらの項目で 1 尺度を構成するには若干無理があるように思われる。

表 1 から 6 までに示した 6 尺度について、因子的な妥当性の低い項目(項目番号をカッコで囲んだもの)を除いて、各尺度の内的整合性を Cronbach の標準化  $\alpha$  係数で示したのが表 8 である。「話題の回避」の尺度の信頼性が他の尺度に比較してやや低いが、しかしいずれの尺度も信頼性をもつとみなすことができよう。

表 8 各尺度の信頼性(標準化  $\alpha$  係数)

「知識の 獲得」	「知識の 提供」	「好意の 獲得」	「好意の 表明」	「関係へ の関与」	「話題の 回避」
.901	.835	.887	.899	.893	.796

## V. 考察と結論

以上の結果から、集団機能の基本的な2次元に対応するとの予想のもとで構成された「知識の獲得」と「知識の提供」、および「好意の獲得」と「好意の表明」の4尺度、さらに、当面の相手とコミュニケーション関係をもつことへの積極性の有無に関係すると思われる「関係への関与」と、当面の話題への積極的な関心の有無に係わると考えられ「話題の回避」と命名された2尺度が比較的高い信頼性をもつ尺度として構成され得ることが示された。

換言すれば、少なくとも以上の6つの側面については、比較的安定したものとしてコミュニケーションの動機的側面にかかわる態度をとらえることができると思うことができよう。

すでに述べたように、これらの各側面の相互関係は今後検討されることになる。

コミュニケーションの過程は、実際には動的に変化することが予想される。従って、その過程で動機的な態度にも変化があり得るように思われる。このように考えると、相互作用過程の流れを中断して特定の時点での態度を測定するために用いられるこの種の質問紙法による測定には、種々の制約があるといわなければならない。しかし、これと同様に動的な過程であるリーダーシップあるいは対人関係の諸次元についての先述の研究の結果が示すように、これらの過程を全体として支える基本的な態度をとらえることにはとくに無理はないとみることができよう。

## VI. 要約

協同的な関係における「共通の方向づけ」あるいは集団の規範などの形

成過程における社会的相互作用の過程を明らかにするための予備的な研究として集団機能の「課題環境の問題の処理」と「対人関係の問題の処理」に対応すると思われるコミュニケーション行為の動機的諸側面をとらえるための質問紙法による測定尺度が構成され、その因子的妥当性と内的整合性信頼性が検討された。

一般性をもつ尺度を構成するために、コミュニケーションへの動機づけの高低、コミュニケーションの相手の役割の取得の難易の差をもたらすと思われる状況を仮想的に設定し、 $2 \times 2$ の4条件の各々に26名の女子大学生を配当して合計104名の資料が分析された。

その結果、「課題環境の問題の処理」の次元に対応すると仮定される「知識の獲得」、「知識の提供」と命名されるものと「対人関係の問題の処理」の次元に対応すると仮定される「好意の獲得」、「好意の表明」と命名される尺度、および当面の相手との関係に積極的な関心をもつか否かに関する「関係への関与」、当面の話題への積極性にかかわるとみられる「話題の回避」と名づけられる尺度が高い信頼性をもって構成され得ることが示された。

#### 注

- (1) この研究は、文部省科学研究費補助金(昭和57年度、58年度、59年度一般研究、代表者 永田良昭、課題番号57510052)によって行われたものの一部である。
- (2) Newcomb (1953) のいう「共通の方向づけ」の成立は、一般には人々の間に「類似した態度を形成させること」としてとらえられている。しかし、その前提として、ある特定の対象に注目することがそでの人々の関係に重要な係りをもつことについての一致した理解が必要であろう。この点については、Newcomb 自身の仮説もあまり明確とはいえないように思われる。このようにとらえても、「共通の方向づけ」が成立した場合には結果的に、その状況の対人関係に関連性をもつ問題についての態度の類似性が成立することになる。

しかし一般的な態度の類似性が共通の方向づけの成立を意味するわけではないことになる。

ここでは、「共通の方向づけ」の意味を、類似した態度の形成ではなく、いかなる事象が当該の人々の関係に関連性をもつかについての共通の理解を成立させることも含むものとらえておきたい。このようにとらえることによって後述する Bales らの枠組と関係づけることが可能になろう。

(3) 判断の「極端さ」と「認知的スキーマの成熟」の関係についての未解決の問題については永田(1983a)を参照。ここでの解釈については、更に検討が必要である。

(4) これらの集団機能は研究者によってさまざまな名称がつけられている。

Cartwright & Zander (1968)は「集団目標の達成」と「集団の維持、強化」と呼んでいる。Collins & Guetzkow (1964)によれば「課題環境の問題の処理」と「対人関係の問題の処理」ということになる。しかし、その内容はほぼ同じとみることができよう。ここでは Colloins らのことばによる。

(5) この点についての詳細は永田(1987)を参照。

(6) 相手の反応が容易に予測できない場合には、積極的にメッセージを送ろうとする行動が生じにくいという問題については永田(1983b)参照。

(7) 想定されたコミュニケーションの相手の属性の違いが一義的に相互作用関係におかれる人々間の関係、あるいは認知される関係に差異をもたらすとはいえないであろう。すなわち、少なくともその状況に関与する人々が相手の役割を取得しようとするか否かという問題がある。相手の役割を取得しようとするか否かが如何なる要因によって規定されているかを明らかにするための手掛りを得るためのひとつの方法としてコミュニケーション過程にはたらく動機的態度を測定する尺度を構成することがこの研究の目的であるからこの点は今後検討される問題である。

(8) コミュニケーション状況を設定するために仮想の相手と意見を交換する場面が教示によって構成される。すなわち、『女性にとって、充実した人生とは、結婚して家庭の主婦となり、家事や育児に専念する生活を通じてはじめて実現される』という意見(論題)に関するあなた(被験者)の考えを、以下の作文の筆者である小学校5年の女の子に述べてみたいと思うかどうかを問う。作文の内容は以下の通りである。

『私の母はとても働きものです。朝早くから小さい弟たちの世話や皆の食事の支度、せんたくやそうじでとてもいそがしそうです。それに、とても器用で、学校の腰かけのざぶとんにハイジのとてもきれいなシチュウをしてくれた

ので友だちからうらやましがられました。

でも、母は、ほんとうはそうじやせんたくはあまりすきでないのかもしれませんが。いつかよそのおばさんに「ほんとうは、家にばかりくすぶっていないで、なにかちゃんとした仕事をしたいけど、まだ小さい子どももいるし……」とっていました。私は、母がどうしてそんなことを考えているのかよくわかりませんが、母が父のように会社へ行ってお仕事をするのはきつとすばらしいことにちがいないと思います。

父は、社会科の勉強をきいても、何でもよく知っています。でも、母はなんだか自信がなさそうで、すぐに「お父さんにききなさい」といいます。きつと母も会社につとめていれば、いろいろなことがなんでもわかるようになるだろうと思います。

私がおかあさんになったら「お父さんにききなさい」といわなくてもいいようになりたいと思います。私は、女の人も家の中のことしか知らないのでは、つまらないと思います。』

なお、以上は想定されたコミュニケーションの相手を小学生とし、かつ相手の態度を予測する手掛りの多い条件の場合である。コミュニケーションの相手を女子大学生とする場合には、この作文を読んでこれに同感している大学生とする。

また、コミュニケーションの相手の態度を予測する手掛りを少なくした条件は、作文を提示せずに、上記の論題として示した意見に対する小学生、大学生の賛否を7段階尺度上の位置で示す。この位置は503名の女子大学生がこの作文からその筆者の態度を判定した中央値を用いた。

(9) 以下の表の各項目の番号は、資料収集の際の項目の配列順を示す。各尺度に属する項目がランダムに配列されている。

(10) これらの計算は、学習院大学計算機センターの計算機によりSPSS統計パッケージのプログラムを使用して行われた。

## 引用文献

Bales, R. F. 1950 *Interaction Process Analysis*. Addison-Wesley.

Bales, R. F. 1958 Task roles and social roles in problem solving groups.

In E. E. Maccoby, T. M. Newcomb, & E. L. Hartley (eds.) *Readings in Social Psychology*. 3rd ed. Holt, pp. 437-447.

Bales, R. F., & F. L. Strodbeck 1951 Phases in group problem-solving. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 46, 485-495.

- Bell, M. A. 1982 Phases in group problem-solving. *Small Group Behavior*, 13, 475-495.
- Berlo, D. K. 1960 *The Process of Communication: An Introduction to Theory and Practice*. Holt, Rinehart and Winston.
- Burke, P. J. 1967 The development of task and social-emotional role differentiation. *Sociometry*, 30, 379-392.
- Cartwright, D., & A. Zander 1968, Leadership and performance of group functions: Introduction. In D. Cartwright, & A. Zander (eds.) *Group Dynamics: Research and Theory*. 3rd ed. Harper & Row. pp. 301-317.
- Collins, B. E., & H. Guetzkow 1964 *A Social Psychology of Group Processes for Decision Making*. Wiley.
- Doise, W., & D. Mackie 1981 On the social nature of cognition. In J. P. Forgas (ed.) *Social Cognition: Perspectives on Everyday Understandings*. Academic Press, pp. 53-83.
- Festinger, L. 1957 *A Theory of Cognitive Dissonance*. Row, Peterson.
- Foa, U. G. 1961 Convergences in the analysis of the structure of interpersonal behavior. *Psychological Review*, 68, 341-353.
- Frey, D., & R. A. Wicklund 1978 A clarification of selective exposure: The impact of choice. *Journal of Experimental Social Psychology*, 14, 132-139.
- Halpin, A. W., & B. J. Winer 1957 A factorial study of the leader behavior descriptions. In R. H. Stogdill, & A. E. Coons (eds.) *Leader Behavior: Its Description and Measurement*. *Research Monograph*, No. 88, Bureau of Business Research, Ohio State University.
- Heider, F. 1958 *The Psychology of Interpersonal Relations*. John Wiley & Sons.
- Jennings, H. H. 1943 *Leadership and Isolation: A Study of Personality in Interpersonal Relations*. Longmans Green.
- 三隅二不二・白樫三四郎 1963 組織体におけるリーダーシップの構造-機能に関する実験的研究. 教育・社会心理学研究, 4, 115-128.
- Mugny, G., & W. Doise 1978 Socio-cognitive conflict and structure of individual and collective performances. *European Journal of Social Psychology*, 8, 181-192.
- 永田良昭 1961 対人関係の次元に関する研究. 教育・社会心理学研究, 2, 160-

173.

- 永田良昭 1965 第一線・第二線監督者のリーダーシップの研究 I. ——リーダーシップ測定尺度作成の試み——. 鉄道労働科学, **17**, 75-82.
- 永田良昭 1983a 態度の『極性化』現象と認知的均衡理論について. 学習院大学文学部研究年報, 第30輯, 335-353.
- 永田良昭 1983b コミュニケーション行為の発生過程の研究 日本グループ・ダイナミックス学会第31回大会発表論文集, pp. 37-38.
- 永田良昭 1984 コミュニケーション行為の発生過程の研究 II. 日本グループ・ダイナミックス学会第32回大会発表論文集 pp. 95-96
- 永田良昭 1987 集団と個人. 佐々木薫・永田良昭編 集団行動の心理学. 有斐閣, pp. 138-168.
- Newcomb, T. M. 1953 An approach to the study of communicative acts. *Psychological Review*, **60**, 393-404.
- Penman, R. 1980 *Communication Processes and Relationships*. Academic Press.
- Schachter, S. 1951 Deviation, rejection, and communication. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **46**, 190-207.
- Sherif, M., & C. W. Sherif 1956 *An Outline of Social Psychology*. Revised ed. Harper & Brothers.
- Tesser, A., & C. Leone 1977 Cognitive schemas and thought as determinants of attitude change. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 340-356.

(心理学科 教授)